生成ＡＩ時代の仕事(2)

進化しつづけるＡＩ

岡﨑 寛貴（おかざき・ひろき）
コンサルティング事業本部コロミルラボ データサイエンティスト

２０２２年に登場して以降、生成ＡＩはさまざまな進化を遂げてきた。今回はそれら進化の概要と私たちの生活やビジネスへの影響について解説する。

生成ＡＩは、世界中の膨大なデータを事前学習していることで汎用的な課題解決能力を実現している。その上で、さらに特定の業界や専門領域に関する知識を与えることで、さまざまな用途に特化したサービスも増えてきている。

たとえば医療分野では、患者との問診から電子カルテを作成したり、病気の診断の補助まで行えるようになった。また法務分野では、一般の人が法律相談を行える呼ばれる枠組みで扱うことで、生成ＡＩの回答用知識として活用することができる。これにより、社内業務に限定した質問に正しく答えることができるようになるのだ。

しかし、それでも一般に、生成ＡＩは最新情報や専門的な知識に際して正確性に欠け、事実に基づかない回答をしてしまうことがある。幻覚（ハルシネーション）と呼ばれる現象である。ＲＡＧは、この幻覚をできるだけ抑えて、回答の精度を向上させる技術の一つであり、現在もさまざまな改良の研究開発が進んでいる。

生成ＡＩの開発環境も進化している。チャットＧＰＴの開発元であるオープンＡＩ社は、ＧＰＴｓと呼ばれる機能を提供している。これにより、プログラミングなどの専門知識がなくても、ユーザーが自分の用途に合わせて、生成ＡＩを簡単にカスタマイズできるようになった。

さらに、生成ＡＩの正確性を高める機能の導入も進んでいる。算術計算、暦、天気など具体的なタスクが質問に含まれていると、自動的に専用サービスを呼び出す機能である。これによって既存のサービスやソフトウエアとの連携が容易になり、生成ＡＩを活用できる業務の幅も一気に広がると考えられる。

生成ＡＩ技術の進歩と共に、その悪用や法令・倫理の問題に対する懸念も高まっている。特にディープフェイクのような悪意をもった偽情報の生成は、社会を不安定化させかねない。一方で、こうしたフェイク情報の検出などＡＩの不正利用や、脆弱（ぜいじゃく）性の診断自体にも生成ＡＩが活用されている。

このように、生成ＡＩの進化は諸刃の剣である。生成ＡＩがもたらす新たな能力の活用と脅威への対応は、社会に新たな技術開発、バリューチェーン、マーケットを生み出し、その結果新たな仕事や業務も創出されることを意味している。私たち人間はそうした変化に柔軟に対応していかなければならない。

（毎週木曜日に掲載）